

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第33回 あなたにとってのライバルは？

小生がまだ幼稚園か小学生だった頃かもしれない、クラシック音楽の世界に二人の巨星がいた。ウィルヘルム・フルトヴェングラーとアルトゥーロ・トスカニーニである。この二人、性格も出身も、当然二人が創り出す「音楽」も全く異なっていた。

W．フルトヴェングラーは、1886年ベルリン生まれの生粋のドイツ人、当時の音楽表現が唯物的感覚的な音楽認識の中で、正統的ロマン主義を位置付け、音楽の思弁的有機的意味を復活させたという意味合いでは、正に歴史的存在と言える。ロマンティックな主観に覆われた解釈は、雄大なスケールを産む。時に自身の感動を躊躇なく表現し、ポルタメントを用い大見得を切ったりもするが、解釈過剰の独善的演奏には絶対ならず、その基礎は、楽譜の精読ゆえの、作曲家の意図を美的に追体験させることにあった。純血な彼の出生から、ナチスの昂揚政策に利用され、国宝的指揮者に祭り上げられると言う悲劇と誤解を生むが、それによって、彼自身の音楽が陳腐化したことはない。1954年没。

一方、A．トスカニーニは1867年、イタリアのパルマの貧しい家に生まれた。彼は自分の演奏する全ての楽曲を原典に即して再検討し、異常な感情移入や勝手な超ロマンリズムを徹底的に排他した。一音一音丹念に処理し、それを異常なほど緊迫した力で型造っていく。そこには自分の感情や趣味を加えることを許さない。また不正確な演奏技術も拒否する、それはあたかも、ギリシャ彫刻の均斉と美に例えられ、カラヤン、バーンスタイン、ショルティ、サヴァリッシュ等々、後世の多くの指揮者に影響を与えた、もっとも偉大な芸術家の一人である。1957年に亡くなった。

両極端な二人の巨匠、お互い競い合い、認め合い、時には非難しながら二人共に大きく育っていった、良きライバルである。

八代目文楽と五代目志ん生、アントニオ猪木とジャイアント馬場、そして項羽と劉邦等...古今東西、あらゆるジャンルで「ライバル」はいる。ライバルが存在したからこそ、お互い切磋琢磨し、技や知恵や能力を高め、磨き抜き、偉大な歴史を築くことができたに違いない。もしライバルがいなかったら、平々凡々とその日を過ごすか、独善的偽善者・独裁者に堕ちるか、何とも悲しい運命を辿ったかも知れない。

我々は、こんな偉人達と同列で論じられる立場にないが、でも「ライバル」はいた方がいい。自分が目指すべきライバル、競い合うべきライバル、そして意識すべきライバル、そんな存在を創るべきだろう。あなたにとっての「ライバル」は？...ライバル造り、是非実践してみよう！！